

子と死別 癒やす冊子

悲嘆の家族に「ひとりじゃないよ」

病気や事故で大切な子どもを亡くした家族に伝えたい。「ひとりじゃないよ」。そんな思いが込められた冊子ができた。病気の子どもとその家族に寄り添った活動を続ける九州大の研究者らがまとめた。亡き子への思いがあふれている。

九大研究者ら作成



①「空にかかるはしご 天使になった子どもと生きるグリーフサポートブック」
②発売を記念した家族交流会会場に並べられた、亡き子の思い出の品や写真＝5月、福岡市の九大病院キャンパス

「もし願いが叶うなら、りいちゃんのお母さんになつて、今度こそはりいちゃんの子育てをしたい」福岡市南区の札幌景子さん(39)は、冊子「空にかかるはしご 天使になった子どもと生きるグリーフサポートブック」に寄せた手記にそう記した。

「もし願いが叶うなら、りいちゃんのお母さんになつて、今度こそはりいちゃんの子育てをしたい」福岡市南区の札幌景子さん(39)は、冊子「空にかかるはしご 天使になった子どもと生きるグリーフサポートブック」に寄せた手記にそう記した。

「もし願いが叶うなら、りいちゃんのお母さんになつて、今度こそはりいちゃんの子育てをしたい」福岡市南区の札幌景子さん(39)は、冊子「空にかかるはしご 天使になった子どもと生きるグリーフサポートブック」に寄せた手記にそう記した。

九州大大学院医学研究院の濱田裕子准教授(小児看護学、家族看護学)が中心になってまとめた。きっかけは脳腫瘍で長女を亡くした母親の「ひとりじゃないと思えるような冊子がほしい」との言葉だった。昨春から準備を始め、趣旨に賛同した福岡・佐賀・熊本・兵庫の4県の22家族が参加した。小児がんや先天性異常、交通事故、突然死など亡くなった理由や年齢はさまざま。家族の手記や専門家からのメッセージのほか、簡単なエピソードを添えた、思い出の品や風景の写真もある。つらさゆえに手記が読めない家族でも、手に取って思いを重ねられるようにと考えたという。

22家族参加 手記や写真

2015年の国の人口動態統計によると、0～19歳の死亡数は4834人。1950年は約27万人いたが、年々減っている。濱田准教授は「『子どもの死』が社会から見えなくなっているぶん、思いを周囲に理解してもらえず、家族は孤立しがち。さまざまな理由で亡くなる現実があることを知ってほしい」。冊子は全143頁。1200部つくり、子どもを亡くした家族に配布している(残数10部)。5月14日には家族の交流会も開かれた。8月中旬以降、九州大学出版会から発行予定。問い合わせは同出版会(092・28333・9150)。(山下知子)

里桜ちゃんは2009年4月に生まれた。出産時、羊水中に出た胎便をのみ込んで呼吸状態が悪くなる胎便吸引症候群に。4日目、初めて抱っこをした札幌景子さんの腕の中で息をひきとった。手記では、親子の幸せな光景に目を向け、「子育て中の人に黒い気持ちを持つた事もある」と正直な気持ちも書きつづった。自分の感情にふたをせず、思いのまま過ぎていいと伝えたいと考えたからだ。里桜ちゃんにはいま、小さな弟がいる。公園で年上の女の子と遊ぶ姿を見ると、他人に「子どもは1人？」と聞かれるとき、悲しさや悔しさ、うらやましさとともに長女を思う。「悲しさは消えないが、同じような経験をした方の文章を読み、生きていく道筋を見いだせた。冊子を通じ、少しでも光を感じてくれれば」50年前に白血病のため12歳で亡くなった大場弘くんも家族も参加した。福岡市南区に住む母親の大場和代さん(88)は、弘くんの弟らが小川で取ってきたメダカの子孫を大切に育ててきたといい、その写真を載せた。添えられた一文は「こんなに手を掛けて愛情を注げるのは、息子と過ごした時間があつたから」力を与えて、いつでも励ましてくれる、ちいさな紳士のひろしくんは、今もお母さんのそばに。